

## 第2回 山国川緑地かわまちづくり検討会

日時：令和2年2月4日（火） 午後7時～

場所：吉富町役場3皆研修室

### 議 事 次 第

1. 開会

2. 挨拶

3. 議事

(1) 山国川緑地における利活用について（ソフト事業：イベント・催し）

(2) その他

4. 今後の予定

5. 閉会

山国川緑地かわまちづくり検討会 委員名簿

(敬称略 順不同)

No.	氏 名	備考1	備考2
1	釘崎 周二	有識者（応募者）	
2	吉田 清勝	有識者（応募者）	
3	向野 倍吉	商工会副会長	
4	山本 哲士	まちづくり会社代表	(株)ツクローネ吉富
5	山口 数彦	太陽の会会長	
6	梅津 常敏	太陽の会副会長	河川敷ボランティア世話役
7	小林 正尚	小学校校長	
8	花畑 寛典	中学校PTA会長	
9	梅津 光文	小学校PTA会長	スポーツ推進委員会副会長
10	鍋島 虔一	有識者	
11	恒成 正幸	有識者	
12	田中 哲	有識者	
13	林 孝俊	有識者	
14	恒成 達也	有識者	

【行政関係者】

国土交通省河川事務所：村田課長、橋本専門員

吉富町役場：花畑町長、守口総務課長、小原税務課長、永野住民課長

石丸健康福祉課長、赤尾産業建設課長、南係長

和才上下水道課長、軍神係長、奥家会計課長

瀬口教務課長、梅林係長、奥邨議会事務局長

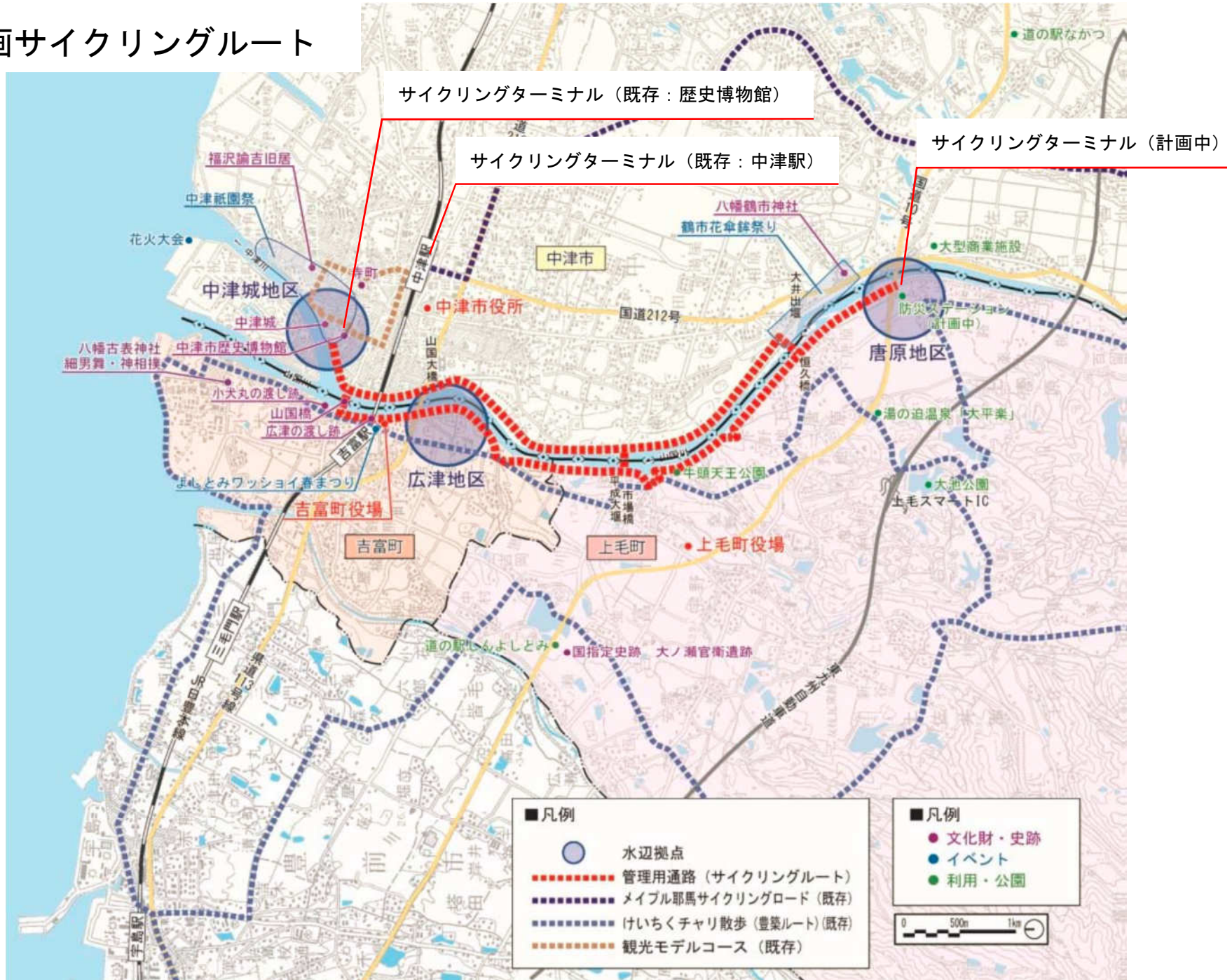
(事務局) 奥田企画財政課長、別府主幹、梅林主査

オブザーバー：中津市観光推進課栗山課長

大分県中津土木事務所 企画調査課荒添主査、建設課房崎主任

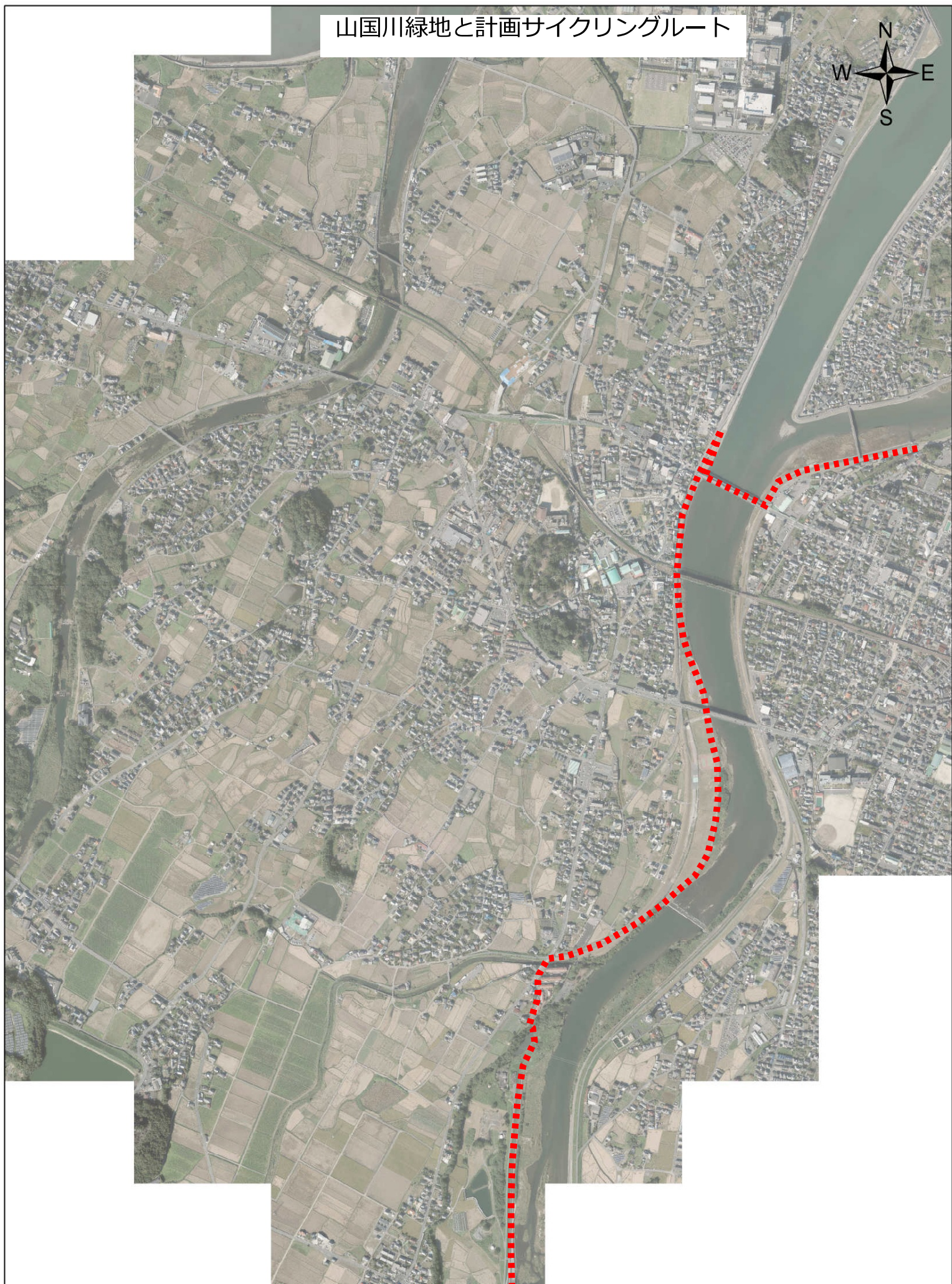


# 計画サイクリングルート



# 位置図

山国川緑地と計画サイクリングルート





「隅田川と町を繋げたい」。そんな思いと共にスタートを切ったイベント・隅田川マルシェ。初回であるLv.0では約40店舗出店し4500人もの人々が来場した。今回の10月5日に開催されたLv.1では、初回より20店舗増加の約60店舗が出店、会場の使用面積も2.5倍に広げた。そもそも隅田川マルシェって何？どんなお店が出ているの？などLv.1のイベントレポートを含めお伝えしようと思う。

## 隅田川マルシェとは？





2017年度に開催された「キッズウォーターパーク」というイベント。堤の斜面を利用した滑り台のようなもので、子ども達はおおはしゃぎ



松山さんは自分のなかに、河川管理者の立場と、自由に使いこなしたいというふたつの立場があることに気がつき、それをうまく活かすことで仕事も愛好家としても両方の立場を楽しめるのではないかとかんがえた。

それは、ふたつの立場のそれぞれのひとたちに、互いの立場を理解してもらうことで実現すると考えた。利用者には、遊びたいだけの利用者に責任をもってもらうことを説き、前例を重んじる役所の仲間には、その意義を説明して口説いた。

河川管理者の立場もわかる、利用者側の立場もわかる、ということでそれぞれをつなぐバウンダリースパナの役割をこなしたのが、松山さんの立場だったのだ。

その松山さんがこの取り組みを心配なくすすめることができたのは、スラックライン連盟愛媛県支部の支部長をつとめる堀内裕美子さんの真摯な態度があったからだ。



日本スラックライン連盟愛媛県支部長をつとめる堀内裕美子さん

実はこの公園のなかの施設、スラックラインのひとたちだけがつかえるわけではなく、自由使用の範囲で使える。公共空間の排他独占的利用にはなっていない。河川敷地準則の特例占用などひつ







大洲市五郎にある**菜の花畑が見ごろ**を迎えています！

毎年多くの人で賑わう五郎の菜の花畑ですが、実は**2つの菜の花畑がある**ことを知っていますか？

1つは「五郎の赤橋」と呼ばれている畑ノ前橋下にある**「畑の前河川敷」**です。

もう1つは対岸にある**「五郎河川敷」**ですが、こちらは**知る人ぞ知る穴場スポット**！

この記事ではそんな2つの菜の花畑を紹介します。

## 📖 目次

- 1 2つの菜の花畑？
- 2 赤い橋と一緒に～畑の前河川敷
  - 1 星の形
  - 2 ハートの形も！
- 3 もう1つの菜の花畑～五郎河川敷
- 4 菜の花まつり
- 5 基本情報～アクセス
  - 1 畑の前河川敷へのアクセス
  - 2 五郎河川敷へのアクセス
  - 3 駐車場
  - 4 畑の前河川敷のGoogleストリートビュー
  - 5 五郎河川敷のGoogleストリートビュー



目次へ戻る





### 鈴木康広「ファスナーの船」

都市の境界である川を「ファスナーの船」がひらき、対岸をつないでいく。  
 日時：12月14日（金）～12月28日（金）12～14時 隅田川の吾妻橋から桜橋の間を運航



「湯舟」

たとえば、川の上に吊るされたミラーボールならぬミラーカーを囲んでのディスコ、都市の境界である川を開いていくファスナーの形の舟、浮かぶ風呂「湯舟」などなど、いずれも劣らぬ面白さ。陣内氏は大阪に比べていまひとつの東京で頑張っている点を評価したとし、「よくぞ頑張ってください」と感情を込めた一言。両国祭、月見、花見に花火とかつて東京の文化を生んできた隅田川が新しい形で文化を生む場になっているようだ。



当日の出店者は、飲食の他、アウトドアショップや地元の航空会社ソラシドエアなど多様な出店がありました。中でも上質なランチを提供しようと、テーブルクロスにお花をそえて、宮観ビュッフェを提供した宮崎観光ホテルさんの取り組みは注目されました。これには問い合わせが殺到しあっという間に予約がいっぱいになったそうです。

天候不順で、残念ながら場所を橋の下に変えての開催となりましたが、その分お客さんと出店者と実行委員の間に一体感が生まれたように思います。当日、至れり尽くせりのご協力を下さった建設会社には感謝の言葉しかありません。絶妙なチームワークで荒天の中でも安全に開催することができました。





それぞれの店舗が対象と想定する客層ごとにゾーニングを行った2018年度

スノーピークだけではなく、新潟市もまた、信濃川やすらぎ堤の活性化が生み出す未来に期待をかけている。信濃川は新潟駅、1970年以降に順次再開発された商業エリア万代シティと古くからの中心市街地古町のちょうど間を流れている。

「元々は新潟港を玄関として栄えてきた新潟ですが、今は駅が玄関口。その変化に伴い、駅に近い万代シティが賑わうようになりましたが、古町には歴史、文化があり、これを活かさない手はありません。新潟市では万代シティと古町を繋ぐ都心軸、そこに直行する信濃川を交流軸と考えたまちづくりを行っており、信濃川やすらぎ堤は市の今後に大きな影響を与える存在です」（前出・西野氏）。

## ■ キャンプを河川敷でやってみたい

さて、最後に今後について。ひとつ、遠来の利用者を増やすという手が考えられるが、それはまだ先と捧氏。

「利用者アンケートによると100人のうち、県外から訪れている人は10人いるか、いないか。将来的には観光資源とする手も考えられますが、まずは住んでいる人がまちのより良い楽しみ方として水辺に親しみ、幸せを感じていただくことが大事。その積み重ねの先に県外の人たちへの訴求がなると考えています」。

30 分間のクルージングが味わえる。船内では青の洞窟ブランドのパスタも食せるようにした。

イルミネーションイベント「青の洞窟」シリーズは、2014 年に東京・中目黒で始まり、渋谷、札幌、大阪と場所を変えて継続的に開催されてきた。2018年に渋谷で開催した際には、約280万人が足を運んだという。



(写真／『青の洞窟 FUKUOKA』実行委員会)

川のさまざまな特性を生かしたプロモーションは、幅広いジャンルに可能性がありそうだ。柔軟かつユニークな発想を生かした、それぞれの地域の人たちを楽しませ、また集客に一役買うようなイベントがますます増えることだろう。

地域の人たちが自ら水辺を使いこなすのみならず、水辺を使いたい企業などとコラボレーションすることによって、地域の水辺をより魅力的にする可能性が一気に広がるのではないのだろうか。



この記事を書いた人

**介川亜紀**



イベントの様子

気がつけば、テント内の座席から溢れたお客さんが当たり前のように係留しているボートの上にあがりお酒や食べ物をひろげ居場所をつくっていました。